

疑似助動詞 *had better* の形式と意味の一考察

阿部生也

Abstract

The aim of this paper is to analyze the forms and meanings of the auxiliary *had better*. I review grammar of *had better* and lay out the usage of it. There are complications on syntax and semantics in its use. I investigate them by means of a corpus search and an informant survey. In particular, the focus is on the negative forms of *had better*, the sentence containing *had better*, which takes an inanimate subject, the sentence having *had better* and perfect aspect and the meaning of *had better*.

1. はじめに

本稿では、疑似助動詞 *had better* について取り扱う。*had better* は *had* と *better* の二語から成る助動詞で実際に使用する際に文法や意味において注意する点が多くある。ここでは、特に形式の上で、*had better* の否定文、そして無生物主語をとる *had better* の特徴を、コーパスやインフォーマント調査を通して探る。意味の面では *had better* が完了の *have* と共起することで生じる意味や *had better* が指示する動作の履行義務を検証していく。

2. *had better* の形式

この章では特に *had better* の統語的な面を調査する。そこで先行研究を取り扱いその問題点を明らかにし、その問題を分析する。

2.1 先行研究

この節では、扱う内容の先行研究と語法書の解説を検証していく。初めに、had better の否定形の先行研究である。一般的に、had better の否定形には多くの場合、had better not があげられる。その例が (1) である。

- (1) a. You'd better not wake me up when you come in. (Swan 2016: 79)
b. You had better not miss the last bus. (Thomson and Martinet 1986: 123)

Swan (2016) は (1a) の例と一緒に hadn't better もイギリス英語で可能になること、またそれが一般的でないことも記述している。したがって、hadn't better という否定形は容認されにくいことがわかる。その一方で、hadn't better の例を挙げている文献もあり、それが例 (2) である。

- (2) a. You hadn't better go. (Palmer 1974: 164)
b. You hadn't better begin. (Jespersen 1954: 183)

Jespersen (1954: V, 183) は (2b) の例に対して、“In recent colloquial language (chiefly U.S.?) the negative is attracted to *had*. . .” と述べている。つまり話し言葉では had のほうに否定辞の not が牽引されるということだ。そのために、話し言葉では hadn't better が使用されやすいことがあるのかもしれない。この had better not と hadn't better の二つの疑問文の可能性における非常に興味深い例が Quirk et al. (1985) の挙げている例 (3) である。

- (3) a. Had we better not go? [Would it be advisable if we didn't go?]
b. Hadn't we better go? [I think we had better go; don't you agree?]
(Quirk et al. 1985: 141)

Quirk et al. (1985) が意味を説明しているように、(3a) は「行かないほうが賢明だろうか？」に対して、(3b) は「行くほうがいいんですかね？」となる。つまり、否定の動詞にかかっているか、付加疑問文として全体にかかっているかという違いがある。この二つは否定文であるとともに、疑問文でもあるために純

粹に否定文とみることができないが、意味の面で非常に興味深い。また、疑問文の作り方にも興味深い点があるがここでは取り扱わない。Quirk et al. (1985)とは異なる説明をしているのが Jacobsson (1980) である。

Jacobsson (1980: 50) は “...there is no corresponding difference in meaning between *You had better not wait* and *You hadn't better wait*.” と述べており、had better not と hadn't better には違いがないとしている。

実際に hadn't better の容認性を調査したのが柏野 (2002) である。その調査では英語母語話者にアンケート形式で hadn't better が容認可になるか容認不可になるかを調査している。そのときに採用された英語母語話者は 78 名で、使用した例文は *You hadn't better stay here tonight*. である。その結果、容認すると答えた人が 10 人、容認しないと答えた人が 50 人、不自然とする人が 18 人という結果となった。したがって、柏野 (2002) の研究では hadn't better が容認されることはほとんどないことがわかる。

続いて、had better の形に注目し、had が落ちてしまう例などを見ていく。had better は使用される時に、had が縮約される 'd better の形と had が完全に省略されて使われる better の形が考えられる。had が完全に省略されている better の例を挙げているのが Quirk et al. (1985) の例 (4) である。

(4) a. They better go home. (Quirk et al. 1985: 142)

b. You better try it again. (ibid: 898)

Evans and Evans (1957: 205) は had が省略されることについて “This *had* may be pronounced so lightly that it is not heard, as in *we better leave*,...” と述べている。つまり had はかなり軽く発音されるために会話上で聞こえないことがあるのだ。この had better の形に関してコーパス調査をしているのが van der Auwera et al. (2013) の調査である。彼らはコーパスを使用して had better, 'd better, better の頻度数の調査を行った。その時に使用したコーパスはアメリカの現代の用法を知るために Corpus of Contemporary American English (COCA) とイギリスの用法の検索のために British National Corpus (BNC) を使用している。その検索結果は以下の通りであった。

van der Auwera et al. (2013) は話し言葉と書き言葉のそれぞれの使用域での件数

COCA	spoken		written		total	
	n	n/million	n	n/million	n	n/million
had better	166	2.03	1093	3.41	1259	3.13
'd better	630	7.71	3055	9.53	3685	9.16
better	1499	18.35	4170	13	5669	14.09

表 1: COCA における had better, 'd better, better の頻度数
(van der Auwera et al. 2013: 126)

BNC	spoken		written		total	
	n	n/million	n	n/million	n	n/million
had better	31	3	449	5.14	480	4.92
'd better	483	46.7	1491	17.08	1974	20.22
better	405	39.16	295	3.38	700	7.17

表 2: BNC における had better, 'd better, better の頻度数 (ibid: 126)

を n で示している。次いで、n/million でその頻度数が相関的に 100 万語中であればどれくらいの件数が期待できるかが示されている。その結果から better の頻度数を他の形の had better と 'd better と比較しての使用の割合を知ることができる。アメリカ英語での had better の使用は better の使用が多く、イギリス英語の用法では 'd better が多いということがこの表から読み取れる。また、彼らの調査は歴史的なコーパスを用いてイギリス英語の had better の形の歴史的な発達を調査している。その際に現代の頻度数を示している BNC の調査結果と Corpus of Late Modern English Texts (CLMETEV) というコーパスの調査結果を掛け合わせて had better の三つ形の発達の変化を示していた。その際に注目した点はそれぞれの形の割合である。以下の表 3、4 の中にある % がすべての形を合わせて 100% としたときにそれぞれの形の頻度数がどれくらいの割合で存在しているか示している。そしてその割合の数値を年代ごとに並べ、変化を明示的に示したものが図 1 となっている。表 3 に関しては、van der Auwera et al. (2013) の文献で直接示されなかったが、ここではよりわかりやすくするために簡易的に作成した。

BNC	Late 20th c.		
	n	n/million	%
had better	449	5.14	20.09
'd better	1491	17.08	66.71
better	295	3.38	13.2
Total	2235	25.6	100

表 3: BNC における had better, 'd better, better の頻度数と分布割合

CLMETEV	1710-1780			1780-1850			1850-1920		
	n	n/million	%	n	n/million	%	n	n/million	%
had better	59	19.42	92.19	234	40.88	84.48	290	46.39	63.46
'd better	2	0.66	3.13	30	5.24	10.83	120	19.19	26.26
better	3	0.99	4.69	13	2.27	4.69	47	7.52	10.28
Total	64	21.07	100	277	48.39	100	457	73.1	100

表 4: CLMETEV における had better, 'd better, better の頻度数と分布割合

(van der Auwera et al. 2013: 128)

[そして、表中の割合の数値を年代ごとに並べ、変化を明示的に示したものが図 1 である。]

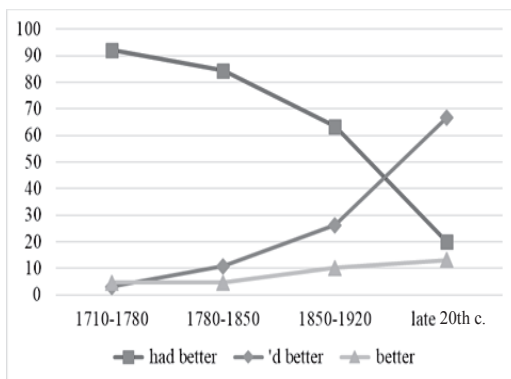


図 1: BNC と CLMETEV の had better, 'd better, better の割合の変化 (ibid.)

図 1 が示しているようにイギリス英語における書き言葉の had better の歴史的

な発達は使用したコーパス上では had better の形から始まり、その使用度が徐々に下がっていることがわかる。それに代わる形として 'd better が 1800 年代から増え始め 1900 年代には had better よりも使われるようになってきている。このように had better の歴史的変化は、コーパスを組み合わせることによって示すことができる。

次に、had better が無生物主語をとる研究では柏野 (2002) がネイティブスピーカーによって提供された例文を調査した。その例が (5) の例である。

(5) a. It had better not rain tomorrow or we can't go to the beach.

b. I spent all day working on the TV. It had better work now.

(柏野 2002: 166)

これらの例は今までの「～したほうがよい」というアドバイスや警告の意味ではなく、祈願の意味で解釈可能であると分析している。この分析の一つの理由としては人間の意思で左右できるものでないために、祈願の意味にしかないのだと言う。この祈願の意味以外でも無生物主語でこれまでにない皮肉的な意味を示している例が (6) である。

(6) Joe: I can explain why I am late.

(遅れたのには訳があります)

Jane: This had better be good.

(さぞかし、いい言い訳なんでしょうね)

(ibid.)

Jane のセリフは Joe の言い訳を偽りだと前提にし、苛立つてのセリフであると説明している。この This had better be good はイディオムとして英語母語話者が一般的に使用するほど頻度の高い表現である。祈願や皮肉などの特殊な意味以外にも無生物主語は使用される可能性があり、例 (7) がそれを示している。

(7) 'There'd better not be any more trouble here, or we'll arrest you. (ibid.: 167)

例 (7) は無生物主語をとりながら、脅迫的な解釈ができる。したがって、無生物主語をとったからと言って必ず特別な意味になるわけではなく、文脈で変化してしまう可能性がある。そこで問題になるのは、どんな場面で無生物主語が使用されるかという点だ。(7) のように脅迫で使用されるのであれば、どうして you という二人称の主語を使用せずに無生物の主語を使用する必要があるのか調査する必要がある。

2.2 had better の否定形

先行研究の節でふれたように had better の否定形には二つの可能性が考えられる。一般的には had better not が使われるが、可能性として hadn't better もある。文献でも hadn't better の例を示しているものがあり、柏野 (2002) の調査でもわずかながら hadn't better を容認する英語母語話者がいることが示されている。この節での焦点は had better not と hadn't better の二つの否定形、どちらが先に使われ始めたか調査することである。その際に、van der Auwera et al. (2013) の示してくれた歴史的に had better がどのように変化してきたかを調査したやり方を踏襲する。本稿では特にアメリカ英語の使用域で調査し had better not と hadn't better の使用率の変化を見ていく。その調査のために Corpus of Contemporary American English (COCA) と Corpus of Historical American English (COHA) を使用する。歴史的なコーパスである COHA と現代的なコーパスである COCA を組み合わせることで had better の否定形は had better not と hadn't better どちらから使われ始めどのように変化してきたかを調べていく。調べ方は COCA と COHA 上で had better not, hadn't better の連鎖式で検索した。その調査の中で、had better の had が縮約されて 'd better になったものと had が落ちて better のみになったときの否定形 better not と had と not が縮約されなかった時の否定形 had not better を追加的に検索した。これらの検索式は had better の直後に not があるか had better の had の方に not があるかということに焦点を当てた検索となっている。以下はその検索結果を示した表である。

COCA	2000s	
	n	%
had better not	1312	99.77
hadn't better	3	0.23
had not better	0	0

表 5: COCA における had better not, hadn't better, had not better の頻度数

COHA	1810-1899		1900-1999	
	n	%	n	%
had better not	791	94.39	1403	95.38
hadn't better	23	2.75	55	3.74
had not better	24	2.86	13	0.88

表 6: COHA における had better not, hadn't better, had not better の頻度数

今回 'd better not と better not の否定形は had better not の否定形と同じ項目でカウントした。そして、今回の検索で見つかった had not better の例は大変興味深いものであった。柏野 (2002) の調査で had not better の容認性を確認したところ hadn't better の縮約形のみで容認され、柏野 (2002) の調査では容認するネイティブスピーカーはいないと説明していた。しかしながら not の部分に強調を置いて相手の応答で反芻する場合には可能という意見があったとしていた。そのため、この調査ではその歴史的変化を見るために、hadn't better とは別にカウントした。この研究で見つかった頻度数にその形の割合がどれくらいあるかを示し、この変化を明示的に示すために以下の図 2 で表わした。

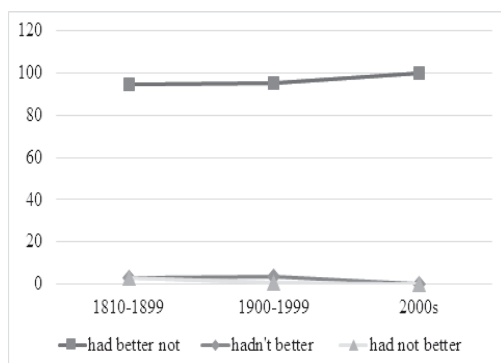


図 2: COCA と COHA における had better not, hadn't better, had not better の割合の変化

COCA と COHA のコーパスを検索した結果では、had better not が一番多く使われていると共に、hadn't better よりも先に使用されており、その例は 1811 年に確認できた。以下はその例だ。

(8) So this is the way you treat me!—You'd better not shew such airs, Miss. Har. Harriet Bloomville Nay, be not angry with me. (COHA, Fiction, 1811)

(9) I lifted up my whip and was about giving him a gentle touch or two! By St. Patrick, said he, you had better not be after that kind of play! (COHA, Fiction, 1812)

(10) Quicksite You had better not be too hasty Mr. Pufpace, you will ruin your son in this way, . . . (COHA, Fiction, 1812)

一方で、hadn't better では COHA 上で 1853 年に初めて使用されており、以下がその例となっている。

(11) The old women's parting advice to me was to try and' git over my nervousness; and she thought I hadn't better drink no more strong green tea. (COHA, Fiction, 1853)

(12) While sensible little Mitty whispread to her mother to know “if she [hadn't better] go out of the way, for fear the sight of her, safe in her mother's log house, might make poor Desire cry the harder. (COHA, Fiction, 1853)

had better の否定形の調査のこれからの可能性として OED online の検索で hadn't better は 1926 年に、had better not は 1641 年に例が確認できるために、もっと前にさかのぼって調査する必要があるだろう。

2.3 無生物主語をとる had better

無生物主語の種類の可能性としてここでは、this, that, it, there を調査する。had better の形も van der Auwera et al. (2013) が示してくれた、had better, 'd better, better の三つの形を想定して、それぞれの無生物主語を検索していく。

COCA	this	that	it	there
had better	43	10	113	18
'd better	1	1	18	4
better	87	6	185	28

表 7: COCA における had better, 'd better, better の無生物主語の頻度数

以上の結果から、形式においては無生物主語で had better をとるものは this と it が圧倒的に多い。それに対して、that, there は稀で見つかった件数は少ない。had better の形にしても縮約形である 'd better の形で現れる場合は少ない。これは、発声上の問題で、発音しづらい可能性があり、件数が少ないのだと考えられる。this や it が多い理由としては、this had better be good などのイディオムのように、よく出てくる表現があること、前言を受けて使用する場合が多いことから、その使用数が多いのだと考えられる。またどの無生物主語も had better という完全な形で使われるよりも、better のみで使用する例の方が多くなっている。ここから、無生物主語を供っている had better も他の主語と同様に発達している。

続いて無生物主語の意味に目を向けてみる。先行研究から無生物主語をとる had better は特別な意味を持つことがあり、祈願の意味や皮肉の意味になる可能性があると柏野 (2002) は分析している。しかしながら実際の例を見ると、それ以外の意味も見発見することができた。それが以下の例である。

- (13) Charlotte went on. “Aunt Vespasia, perhaps that had better be you. None of us knows her, so we shall have to invent an excuse. . . .”

この例 (13) は祈願や、皮肉の解釈以外に当然としての解釈が可能であると考えられる。これは、must や should にすでにある解釈であるために妥当である

と思われる。問題はその当然の度合いですでにあるような、should より強く、must よりも弱いかどうかである。予想としては同じような当然の度合いが採用されそうである。

ここで次の研究課題として祈願や、当然以外の解釈で、どうして had better は無生物主語と共起する必要があるのかどうかを検証する必要がある。例えば、例 (7) のように脅迫の解釈で使われる場合にあって you を使わずに無生物主語にすることにどんな効果があるかをより深く分析していきたい。

3. had better の意味

この章では、had better の意味に関する項目を取り扱う。had better が使われる時には、この意味に関する項目で、ある程度使用に制限がある。前章同様に先行研究から問題点を明らかにし、その問題が実際にあるか、コーパス調査を主眼にし、検証していく。適宜インフォーマント調査の意見も参照していきたい。

3.1 先行研究

まず、had better と完了の have が共起する例を参照していく。had better は完了形の have と共起する可能性があると多くの文献で紹介されている。しかしながら、その解釈の内容で注意しなくてはならない点がある。それが未来の出来事に言及する解釈と過去の出来事に言及する解釈が考えられることである。以下の例 (14) は未来の出来事に言及している例である。

(14) You'd better have finished by tomorrow. (Eastwood 1994: 145)

この例は未来的な意味で解釈され、訳としても「明日までには済ませておいたほうがいいよ」となる。had better は形の上で had が have の過去形の形をしているが、意味としては仮定法的に使用され、現在から未来までのことについて言及する時に使われる。この had better の本質的な意味内容は、先に挙げた (14) の例文の未来または現在のことに関してのアドバイスになることと矛盾しない。一方で、一般的に should + have や must + have のように助動詞と

完了形を組み合わせると、過去の出来事についての解釈がなされ、「～すべきだった」や「～にちがいがなかった」などとなる。このように過去の出来事に言及する意味で訳す had better + have の可能性が考えられるが Mitchell (2003) は過去に言及している had better + have は非文になると指摘している。これは had better が本来持っている現在や未来に言及する意味からして、矛盾してしまうことや、後ほど言及する had better の履行義務の点から非文になってしまうと考えられる。Mitchell (2003) は自身の説明のために以下の例を挙げている。

(15) a. *I had better have stayed at home.

b. We'd better have finished this work by the time the boss comes back.

(Mitchell 2003: 134)

例 (15a) は過去のことに言及している可能性が考えられるが、(15b) の文は未来の出来事に言及している解釈ができる。

had better + have の形で、過去の行為について言及する意味と未来の行為について言及する意味があると述べている例が、安藤 (2008) のあげた、(16) と (17) の例である。訳からもわかる通り、(16) は過去の出来事に、(17) は未来の出来事に言及すると解釈している。

(16) When you worked for George, you had better have done your homework.

(ジョージのために仕事をしたときは、君は仕事を済ませておいたほうがよかったのさ) (Google) 安藤 (2008: 372) より引用

(17) You'd better not have changed your mind when I call tomorrow.

(あす電話するときに、心変わりしてないほうがいいよ)

(Leech 1987) 安藤 (2008: 372) より引用

安藤 (2008) が説明しているような過去の出来事に言及している例を紹介している文献は、中野 (2014) でも確認できる。そこでは、Jespersen (1956) で挙げられている You had better have stayed with us. を提示し、「拙宅に泊まったほうがよかったのに」という訳をつけている。しかしながらまたこれが非実現を

表す完了形不定詞と説明している。中野 (2014) はこの例を挙げて、『英和活用大辞典』が had better と完了形不定詞を用いることを嫌う人もいるという注記を提示したり、Declerck (1991) の had better + have の言い方を避けた代替表現を載せたりするなどして、had better + have は一般的でないとして説明している。実際に柏野 (2010) は過去の出来事に言及している解釈が間違いであることを指摘している。彼は had better + have は should + have と同じ意味で用いられることはなく、“話し手がその結果はまだ知らない場合に用いられる”と説明している。その例として以下の例を挙げている。

(18) You'd better not have scratched my car. (柏野 2010: 127)

この (18) の訳として「俺の車に傷をつけなかっただろうな。」という訳をつけている。つまり、脅迫、警告の意味を込めて、そうしていたら大変なことになるぞ、と未来に志向した言及になるとしている。

ここでの問題点は had better + have の形で should + have と同じような過去の果たされなかった出来事に言及できるのかということである。それをインフォマントのコメントを参照して明らかにしていく。

続いて、had better の履行義務という性質について確認していく。had better は解釈の範疇を越えて、その本質的な意味に had better によって提示された行為は履行されなくてはいけないという制約がある。以下がその例である。

(19) *He had better tell her but I don't suppose he will.

(Huddleston and Pullum 2002: 196)

履行義務という制約があることによって、(19) のような、話者自身がその行為が行われないと予期するような文が共起すると非文になることを示している。Huddleston and Pullum (2002) は had better によって示される行為は主観的に最善である行為であるために、不履行を示唆する文とは共起しないとしている。その解決策として、had better の代わりに should を用いると可能になることを次の例で示してくれている。

(20) He should tell her but I don't suppose he will. (ibid.)

これは義務を示す度合いが強いので、その度合いが had better よりも弱い should で交換可能になっている。しかし、その度合いが had better よりも強い must になると had better と同じように履行的な義務があるとしている。

この had better の本質的な意味である履行的な義務は先ほどの had better + have で過去の出来事に言及することで非文になってしまう可能性があることと関連していると思われる。つまり、履行されなくてはいけない行為が果たされなかった過去の的に解釈されるとその本質的な意味と矛盾してしまうために、had better + have の過去の出来事に言及している解釈は非文になっていると考えることができる。

3.2 had better と完了の have の共起

ここでは had better + have の形式とその意味内容を調査していく。形式については実際に had better + have の形で使用されているかどうかをコーパス上で調べる。その際には、van der Auwera et al. (2013) の示してくれた had better の三つの形 had better, 'd better, better に注目して検索を行う。意味内容については、インフォーマントからいただいたコメントを参照することで、解釈の可能性の手掛かりとしていきたい。まずは以下の表が COCA 上での検索結果である。検索式は had better have, 'd better have, better have で検索を行った。

COCA	n
had better have	3
'd better have	6
better have	14

表 8: COCA における had better have, 'd better have, better have の頻度数

この頻度数から、やはり had better と完了形の have が共起することはかなり珍しいと考えられる。またインフォーマント調査において、いただいたコメントを参照してみると、過去の出来事に言及して解釈しているネイティブス

ピーカーはおらず、解釈として、すでに行為をやっていることを期待しており、もしやってなかったら大変なことになるという解釈をしていた。現在インフォーマント調査は途中経過のために結論を出すことはできないが、やはり過去の出来事に言及している解釈は大変疑わしいと言わざるを得ない。

3.3 had better の履行義務

続いて had better の履行義務の有無を確認していきたい。この内容についてはコーパスでの調査は困難なため、インフォーマントによる容認性の判断とコメントを参照することで次の研究のための手掛かりとする。インフォーマント調査で使用した例文は、Huddleston and Pullum (2002) が提示する例文を採用し、He had better tell her but I don't suppose he will. がどの程度容認されるか調査した。現在調査中のために途中経過となるが、これまでに 11 名の英語母語話者から回答があった。その結果、容認する人が 9 名、不可とする人が 2 名となっている。このことから、had better の履行義務は疑わしい可能性がある。そして、その意味の調査で、容認した場合にどのような解釈になるか尋ねてみると、had better で指示した行為をやると期待しているが、同時にやらないとも思っているという解釈だとコメントしてくれた。つまり、had better と一緒にその行為が行われないことを想起する文と一緒にあっても、問題になっていないということになる。このことについて結論をつけるのは調査を終えてからでないといけない。

4. 結語

本稿では had better の様々な形式、意味内容についての調査を行ったが、すべてが簡易的な調査のために結論を導き出すことができない。しかしながら、今まで議論にならなかった had better の研究をしていく上で、重要な問題点を挙げ整理することができた。これらの細かい文法項目を少しずつでも明らかにすることで、had better の語法をより理解し、その文法の精度を高めていきたい。

参考文献

- Collins, P. 2009. *Modals and Quasi-modals in English*. New York and Amsterdam: Rodopi.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Eastwood, J. 1994. *Oxford Guide to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, B. and C. Evans. 1957. *A Dictionary of Contemporary American Usage*. New York: Random House.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. New York: Cambridge University Press.
- Jacobsson, B. 1980. "On the Syntax and Semantics of the Modal Auxiliaries *Had better*." *Studia Neophilologica* 52, 45-53.
- Jespersen, O. 1954. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. III, IV, V. London: Allen and Unwin.
- Leech, G. N. 1994. *Meaning and the English Verb*. Second Edition. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Mitchell, K. 2003. "Had better and might as well: On the margins of modality?" In Facchinetti, R., M. Krug and F. Palmer (eds.). *Modality in Contemporary English*, 129-149. (Topics in English Linguistics 44.) Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Palmer, F. R. 1974. *The English Verb*. Second Edition. New York: Longman.
- Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, G. and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. 2016. *Practical English Usage*. Fourth Edition. Oxford: Oxford University Press.
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar*. Fourth Edition. New York: Oxford University Press.
- van der Auwera, J., D. Noël and A. Linden. V. 2013. "Had better, 'd better and better: Diachronic and transatlantic variation". In Marín-Arrese, J. I., M. Carretero J. A. Hita and J. van der Auwera (eds.). *English Modality: Core, Periphery and Evidentiality*, 119-154. (Topics in English Linguistics 81.) Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 荒木一雄、小野経男、中野弘三 . 1986.『現代の英文法 第9巻 助動詞』東京：研究社 .
- 安藤貞雄 . 2008.『現代英文法講義』東京：開拓社 .
- 柏野健次 . 2002.『英語助動詞の語法』東京：研究社 .
- . 2002.『英語語法レファレンス』東京：研究社 .